

若年層の「移住者」の活躍から見える「次世代の豊かさ」

—宮城県気仙沼市唐桑町からのレポート—

研究員 大友 和佳子

目次

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. はじめに | 5. 「受け入れ」側へのインタビュー |
| 2. 宮城県気仙沼市概要 | 6. 考察 |
| 3. インタビュー方法 | 7. おわりに |
| 4. 「移住者」側へのインタビュー | |

1. はじめに

「地方移住」ブームである。昨今、メディアでは、「移住」というキーワードで、自給自足や地域の自然と共存したライフスタイルが色鮮やかに描かれている。人口が集中し、物価も高い東京で暮らすより、広々とした自然の中でコストをかけない暮らし、そうした暮らしに価値を見出す人が増えれば、東京一極集中という課題へも良い影響があるかもしれないという、一つの現代版ストーリーとも言える。

さらに、最近の傾向では、20代～30代の若い世代の地方への関心が高まっている¹。しかし、全ての町に均等に移住者が流入しているわけではない。ある特定の場所に、移住者が集中しているのだ。

本稿では、そうした現象を踏まえ、東日本大震災後の気仙沼市における若年層の移住者の活躍に着眼した。2011年の東日本大震災以降、被災地には主にボランティアスタッフが、大量に流入した。そのまま、東北地域に移住した数は少なくないが、移住者が定着、活躍

できるかについては地方特有の壁がある。しかし、本稿で取り扱う宮城県気仙沼市では移住者の活躍が著しい。その要因と意味について、本稿を通して考えてみたい。

先ず、次節で気仙沼の概要について述べる。

2. 宮城県気仙沼市²概要

宮城県気仙沼市は、リアス海岸の美しい水産産業を基幹産業とする海洋都市である。

気仙沼市では震災前から地域を内発的に盛り上げる様々な取組みが見られ、リアスの海・山・川・里の豊かな自然環境で生まれた新鮮な食材と、そこから生まれる固有の食文化を活かし、1986年には「魚食健康都市宣言」、2003年には全国発である「気仙沼スローフード都市宣言」を行っている。

本稿で取り上げる唐桑町（図1）は、宮城県本吉郡北東部にかつて存在した町で、2006（平成18）年に気仙沼市との新設合併により、新制気仙沼市となり、旧町域の住所にその名を残した。太平洋に面し、三陸海岸の中ほど、複雑な海岸線に富む唐桑半島上にあり、漁業

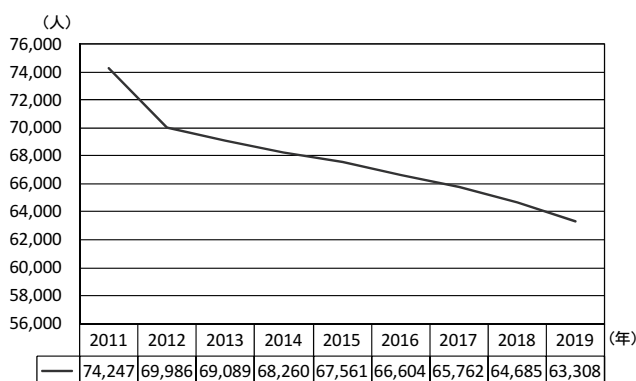
1 平成27年国勢調査における、都市部から過疎地域への移住者を年齢別にみると、20代及び30代の若年層が約45%と大きな割合を占めている。都市住民への移住希望に関する調査においても、若年層の割合が高いと言う^[1]。

2 唐桑町が存在する気仙沼市全体の概要について最初に述べる。

(図1) 気仙沼市唐桑町地図



(図2) 気仙沼市の人口変化 (2011年－2019年)



(出所)「データで見る復興の状況」^[2]、平成31年気仙沼市、より筆者作成

を主な産業とする。岩手県陸前高田市との県境の町でもある。南部は唐桑半島の先端部であり、気仙沼湾に通じる。西部は気仙沼市に属する大島の対岸であり、町の西境は大島と本州の間に大島瀬戸と呼ばれる海峡部に終わる。

気仙沼市は、2011年の東日本大震災では甚大な被害を受け、死者・行方不明者は2,266人、全壊・半壊住家が1万4,375軒に及んだ。さらに、津波浸水地域に所在する事業者数、従業員数が気仙沼市全体のそれぞれ84.0%、86.1%に達し、被害が壊滅的となった。そして、こうした被害状況に追随するように、特に若年層の人口流出が深刻である。

震災が発生した2011年から2016年にかけての気仙沼市の人口変化を図2に示した。人口は、2011年に74,247人であったが2016年には66,604人にまで減少している。現在の気仙沼市における最大の課題は、若年層の人材流出であり、30年後には人口は現在の半分になる

という報告もある^[3]。

市役所では「プロジェクト1.90」を始動し、近年1.30～1.50で推移する合計特殊出生率を、30年度に1.90まで引き上げる施策に取り組んでいる。プロジェクトでは、新婚家庭への引っ越し費用補助や入学祝い金の支給など、夫婦の始まりから子育てまでを手厚く支援している。さらに、市外からの移住・定住への期待も高く2016年には気仙沼市移住・定住センター「MINATO」が設立され、移住者による移住者支援の流れがある。

本稿で取り扱う気仙沼市の「移住者」³の数については、「MINATO」への相談件数と、「MINATO」を通して移住した人数を述べると、相談件数が、2016年142人、2017年400人、2018年497人、移住者数が2016年3人、2017年11人、2018年14人である⁴。さらにその内、2011年から2019年4月までに唐桑町に移住をした延べ人数については30人程度⁵との回答を得ている。

3 「移住者」の定義については、現在明確なものは存在していないが、小田切・中島・阿部^[4]の実施した「移住者総数、5年間で約4倍に－移住者数の全国調査(第2回全国調査結果より)－」によると、①道府県を跨いで転入した人、②移住相談の窓口や支援策を利用した人、という制約をつけている。

4 これは「MINATO」を通して把握している件数のため、実際の総数はいくつと推察される。

5 唐桑地域における移住者数について公的な資料は存在していないが、2018年に実施した唐桑まちづくり協議会へのインタビューによると30人程度なのではないか、という回答を得ている。

3. インタビュー方法

本稿では、気仙沼市の中でも特に移住者の定着がさかんである唐桑町でインタビュー調査を実施した。実施期間は2017年12月から2019年2月にかけての約1年3カ月である。インタビュー内容は、東日本大震災後に唐桑町に移住した移住者3名、唐桑地域の地元住民3名に実施したものを記載した⁶。

インタビューの視点は次の通りである。

- (1) 移住者が見出している地域の価値
- (2) 移住者が地域に与えている効果
- (3) 移住者と受け入れ側の「協同の関係」の在り方

この3点について、主に移住者側と受け入れ側へのキーマンへのインタビューを実施した。

4. 「移住者」側へのインタビュー⁷

- (1) 一般社団法人 まるオフィス 代表理事

K氏（29歳）

－「唐桑町独自の「豊かさ」を50年後に残したい」－

- 1) 唐桑町との関わりのきっかけ

写真1 K氏



K氏は、2011年の東日本大震災後に、ボランティアとして唐桑町を訪れた（当時大学4

年生）。K氏は、当時の状況を次のように語る。

「2011年の8月～9月で殆どのボランティアは帰っていきました。そんな中、被災者の、これ以上がんばれない。一体いつまで仮設で暮らすのか。限界だ。どうすればいいのか。という声を聞きました。こうした声を聞き、唐桑を去ることができなくなりました。」

その後、K氏の活動は、がれき撤去などハード的な支援から「地域の魅力を地元の人に発信する」まちづくりの活動へと転換していく。移住後の活動のポイントを次に示した。

2) 移住後の活動のポイント

- ① 地域の人々に地域の魅力を発信する

K氏が、まちづくりで最も重視したのは、「地元の人が地域の魅力に気づき誇りを持てるようになること」である。「『よそもの』である自分たちが、素晴らしいと賞賛することで、自分達の「当たり前暮らし」に価値があるのかもしれないと、地元の人が考えるようになりました。それが一番大切です。」

- ② 地域の魅力を地域の小中学生に伝える

「気仙沼地域には大学がないため、大学進学等で地域を離れる割合が多いです。そのた

写真2 漁師体験プログラム



6 実際のインタビューは、唐桑町の住民30人以上に実施しているが、本稿では紙面の都合上抜粋し、それぞれ3名を取り上げた。

7 インタビュー内容及び写真については掲載の許可を得ている。

め、地域を離れる前に地域の魅力を知り、愛着を深めるための漁師の体験プログラムをしています。「地域協育」（地域ぐるみで力を合わせて次の世代を育て、子供も地域も双方が豊かになる取組み）に力を入れています。」

3) 活動の苦労や課題ー地域コーディネート

「地域を活性化する上で、地域全体の将来的なビジョンを描ける戦略的な発想ができる人材が必要です。唐桑町は人材が素晴らしいので、そうした人材を育成していきたいです。また、地域をコーディネートしていくことが重要ですが、お金が発生しづらいということは最も課題だと思います。」

4) これからの目標ー浜の暮らしを守る

「海から財を得る浜の暮らしを守ることで、日本全国の地域が画一化していく中で、こうした「浜の暮らしの豊かさ」に皆が気づく日が来ると考えています。地域の自然生態系に即した豊かな暮らしを次世代につなげることが当面の目標です。」

(2) 一般社団法人 まるオフィス 職員 N氏 (27歳)

ー「地域の魅力を地域の人に発信したい」

写真3 N氏



1) 唐桑町との関わりのきっかけ

N氏が唐桑町を訪れたきっかけも東日本大震災である。当時の様子をN氏は次のように語る。

「2011年、東日本大震災が起きました。地域がまるごとなくなることってどういうことなんだろう、という思いから気仙沼を訪れました。そこで、とても辛いはずなのに「生きる」とことと本気で向き合い、地域のために利他の心でがんばる大人と出会いました。こんな大人と一緒に働きたい。この地域のために何かしたいと思うようになり移住を決めました（震災当時、大学4年生）」。

2) 移住後の活動のポイントー地域文化の魅力を伝える

移住後は、地域の魅力を地域の人に発信する取組みを中心に展開している。N氏が見出している「地域の魅力」は次のようなものである。

「地域の一見、非効率に見えるお彼岸につくる棚や、旬の魚介類を料理して食べることで、地域の人々で作るお祭りなど、地域文化に魅力を感じています。ここにしかない魅力を地元の人に伝え気づいてもらうことが、自分達の役割であると考えています。」

3) 活動の苦労や課題ー想いを共有する仲間

N氏に移住後の苦労や課題についてインタビューをした。「移住をする前は、身寄りもないので不安でしたが、同じ想いや目的を持っている仲間がいること。普通の友達とは違う仲間がいることが安心感につながりました。また、もう一つの困難としては、漁業の体験プログラムの事業化です。そこにはむずかしさもありました。」

4) 今後の目標—起業とおばあちゃん達の幸せ

今後の目標については、N氏は次のように語る。「今までは復興予算の枠組みの中で、市の仕事を受け持つことが多かったのですが、2019年から魚市場前でのカフェの経営にチャレンジしようとしています。自分自身が起業し、独り立ちしていくことと、ここで暮らしてきたおばあちゃんたちが、ここで生きてきてよかった、と思えるようなまちにしていこうことが今の目標です。」

(3) S氏（唐桑ユースホステル勤務）37歳 —「地域の人々の伴走者でありたい」—

写真4 S氏



1) 唐桑町との関わりのきっかけ

S氏の唐桑町との関わりのきっかけも東日本大震災後の緊急支援ボランティアである。唐桑町への移住の要因についてS氏は次のように語る。「震災直後、大変な状況にもかかわらず、浜のお母さんたちは優しく懸命に生きていました。そのたくましく優しい姿に心揺さぶられたのが移住のきっかけでした。」

唐桑町の魅力は、「人を受け入れる、排除しないこと」だと思っています。」

2) 移住後の活動のポイント—主体は地元住民

「活動をする上では、あくまでも主体は地元住民であることを大切にしています。震災後コミュニティが分断されたので、元の関係を取り戻すお手伝いが重要だと考えています。」

3) 今後の目標—「宮城オルレ」

S氏が、今後応援していきたい動きは次のようなものである。「今の関わりを大切にしつつ、唐桑町で始まった観光事業の「宮城オルレ」⁸を応援していくことです。自然の中で歩くことを重視した環境プログラムは、唐桑の魅力をわかりやすく伝えるツールとして応援していきたいです。」

5. 「受け入れ」側へのインタビュー

(1) 牡蠣養殖業 H氏（39歳）唐桑町生まれ で地域のリーダー的存在

—「移住者に衝撃を受けてまちづくりを開始」—

1) 「移住者」との出会い

写真5 H氏



H氏は、唐桑町でカキ養殖業を営む男性である。「2011年の東日本大震災を契機に大量

8 <https://www.miyagiolle.jp/course/kesenuma/>

のボランティアが地域に入ってきました。そして彼らが、この地域に残り何かをしようとしている姿に非常に衝撃を受けました。自分はこの地域には何もなかったと思っていたのに、です。」

2) 「移住者」によって起きた地域の変化

震災後の「移住者」の若者達はH氏に大きな影響を与えた。

「震災があって地域を初めて見直しました。移住者が唐桑町に価値を見出し活動するようになり、「なぜ、よそものが自分達以上に自分達の地域のことを知っているんだ。」と嫉妬するようになりました。」

移住者が作った若者のサークルである「唐桑丸」に入り、小中学生に地域の魅力を伝えるようなイベントの企画をするようになりました。震災前の自分から見れば、自分がまちづくりの主体になるなんて考えられません。地域づくりになんて何の興味もなかったですから。」

H氏にとって、「移住者」が地域のために活動する姿は、地域に目を向ける大きな刺激となった。

- (2) B氏(70歳)―震災後ボランティアの若者達の居場所となる「かえる塾」を主催。
―「多くの若者達を受け入れ、地元のニーズと若者をつないだ」―

写真6 B氏



1) 「移住者」との出会い

B氏は震災で家を失うという被害を受けているが、震災後に唐桑町を訪れた大量のボランティア達の受け入れを「かえる塾」を通して実践した。「震災後はみんなここに遊びにきていたんだ。若者達は、自分達の生きる希望として、絶望の淵から自分を救ってくれました。今の人はじっくり人と向き合って対話する場所が少ないのかもしれないね。しっかりと話を聞いてあげるのがとてもいいみたいだ。」

かえる塾には、2019年現在も地域内外からの人々が訪れ、唐桑町を訪れる人々の交流拠点となっている。

2) 「移住者」によって起きた地域の変化

B氏は震災直後の様子について次のように語る。「震災直後の瞬間交流人口は、唐桑町のここ100年の間で最大だったのではないですかね。それはもう、すごいインパクトでした。特に地元の若い人たちの「積極性」を引き出すような、そんな刺激になりました。」

B氏自体も、移住者の若者に救われたように、大震災という過酷な状況下で移住者と地元住人の強い絆が生まれているようだ。

- (3) O氏(70歳) 漁業を営み、震災後に若いボランティアスタッフの受け入れに従事
―「移住者を支える人も必要です」―

1) 「移住者」との出会い

写真7 O氏



〇氏は移住者の陰となり日向となり移住者を手厚くサポートしている人物である。

「震災後に若い人たちがたくさん入ってきたので、活動の拠点となるような空家を提供しました。気仙沼の人脈を紹介したりして面倒を見ています。陰でサポートをする人がいなければ、移住者の活躍も難しいと思います。」

2) 「移住者」によって起きた地域の変化

〇氏は、移住者と地域の関係を次のように語る。

「地域のお祭りの担い手になったり、みんなかわいがっていると思います。ただ最近では、地元の人との交流が足りてないので、移住者の人が勝手に楽しそうにしているとみている人もいます。もう少しお茶でも飲みながら、お互いに交流できる場があればいいなあ、と思っています。」

〇氏へのインタビューからは、震災直後から地域住民が、ボランティアの若者達を積極的に受け入れ、地域での人との関わり方、家や人脈、事務所の提供などを通し、活動を陰から支え共に生きようとする姿が見られた。しかし、地元住民と移住者の交流が十分ではないのだろうか、という声もあり、一つの課題と見ることもできる。

6. 考察

それでは、考察に移りたい。

「移住者」が見出している地域の価値には次の3点がある。

- (1) 唐桑町独自の暮らしの豊かさ（海から恵みを得る生活、伝統的なお祭り、行事などの丁寧な暮らし方）
- (2) 災害に直面した人々が地域を再生しようとするエネルギーや明るさ（生きる力）
- (3) 地域のお年寄り等との人間関係、人を勇気づけ受け入れてくれる人間としての温かさ（コミュニティの力）である。

さ（コミュニティの力）である。

つぎに「移住者」が地域に与えている効果には、

- (1) 特に地元の若い人への刺激
 - (2) 地域の伝統行事の担い手
 - (3) 「地域の人が地域の魅力に気づき誇りを持つ」ことを促す
- がある。

写真8 地域の伝統芸能に参加する「移住者」



さらに「移住者と受け入れ側の協同」が進められている背景には、受け入れ側が、若年層の移住者の活動を、積極的に受け入れ、サポートしている状況が見られた。

地元の人と移住者を「つなぐ」役割を担っている人材が存在していることは注目したい点である。

しかし、「移住者」側の地域リーダーであるK氏は、インタビューの中で、「地域をコーディネート」する人材が必要だが、そうした労力はお金になりにくい、またお金ではない暮らしの「豊かさ」を可視化することも難しい。」と指摘している。「人と人とをつなぐ」ということは、今後の地域再生においてもキー概念であると考えられるが、事業として成立しにくいのであれば、公的な視点から補強していくことへの検討も必要なのではないだろうか。

7. おわりに

本稿では、主に宮城県気仙沼市唐桑町における「移住者の活躍」に焦点をあて、彼らが地域に見出している価値、地域に与えている効果、地域住民との協同を促しているものの3点について報告した。

宮城県気仙沼市唐桑町では、「移住者」による「地域の豊かさ」の再発見が起こり、地元住民の誇りの形成につながっている。そして、そこには、地域住民と移住者をつなぐ豊かなサポート体制がある。

経済性や便利さ、効率性といったものさしでは、都市の方が豊かであるという見方が、戦後の日本社会では主流の価値観だったかもしれない。しかし、このような若年層の移住者が、地域文化や暮らし方に「地域の豊かさ」を再発見する姿は新しい時代の価値観として大いに注目したい⁹。

東日本大震災は、東北地域に多くの傷跡を残した。しかし、こうした新しい内発的な動きも目覚ましい。様々な課題を抱える日本社会において、「私達が目指すべき未来の社会」について、本事例が議論の一助となってくれれば幸いである。

(参考文献)

- [1] 「田園回帰」に関する調査研究報告書（概要版）、平成30年、総務省 地域力創造グループ 過疎対策室
- [2] 「データで見る復興の状況」（平成31年）、気仙沼市
- [3] 「日本の地域別将来推計人口」（2018年）、国立社会保障・人口問題研究所
- [4] 小田切徳美・中島聡・阿部亮介（2016年）
「移住者総数、5年間で約4倍にー移住者数の全国動向（第2回全国調査結果より）ー」
『月刊ガバナンス』2016年3月号

- [5] 小田切徳美（2016年）「田園回帰の実相」、
特集 新・地方創生、『Keio SFC journal』
Vol.16 No. 2、PP. 10－12

9 小田切^[5]は、「こうした都市から農山漁村等の地方への流れである「田園回帰」を、戦後の50年に進んだ農村の過疎化と東京の一極集中の中、今までの半世紀に対し、私たちがどのような社会を形成をしていくかの「岐路」を示唆している」と述べている。